

アミール・ティムール・キュレゲン

——ティムール家の系譜とティムールの立場——

間 野 英 二

中央アジアの生んだ世界征服者ティムール Timur (1336—1405) の生涯については、なお検討すべきいくつかの問題が残されている。彼の出自に關する問題もその一つであり、伝えられるティムール家の「系譜」の信憑性についてすら、なお定説が確立されていない状況^①にある。

そこで本稿では、まずこの「系譜」の内容と、それと表裏一體をなすティムール家に關する一傳承を紹介し、ついで、モンゴル時代及びティムールの同時代人達の諸史料によつて、これらの系譜及び傳承を批判・検討してみる事にしたい。そして、これらの系譜・傳承を必要としたのは、王朝の創設者ティムール自身では決してなく、いまや榮光に輝く新王朝の支配者として中央アジア・イランに君臨するに至つた彼の子孫達であつたに相違ない事、そしてさらに、ティムール自身にとって重要であつたのは、その呼稱アミール・ティムール・キュレゲンが明確に示している如く、あくまでアミールないしベクとしての身分と、キュレゲンすなわちハーン家の女婿としての立場のみであつた事を確認したい。

一

まず、問題のティムール家の「系譜」の内容を紹介しよう。この系譜は、サマルカンドのグーリ・アミール廟 Gur-i

Amir に安置されたティムールの墓石をはじめ、傳説時代よりティムール朝期に至るモンゴル族の系譜集『ムーイッズ・アルアンサーブ』^④ *Muizz al-Ansāb* シヤラフ・アッディーン・アリー・ヤズディー Sharaf al-Dīn 'Alī Yazdī の『勝利の書』*Ẓafar nāmā* 無名氏によるウルグ・ベクの『四ウルス史』*Tārīkh-i ulūs-i arbā* の一異本『トルコ諸族の系譜』*Shajarat al-Atrāk* ⑤ ニールホーンド Murkhwand の『清淨の園』*Rawdat al-Safā* ⑥ ホンダール Khwandamir の『道德の伴侶』*Habib al-Siyar* ⑦ 等の史書に收録されている。

いま、これらの内、グーリ・アミール廟の墓石にみえる系譜をとりあげて紹介したい。この系譜にみえる人名と、他の諸史料にみえる人名との間には、その綴字に若干の相異がみられるが、系譜そのものには大きな相違は見られない。

さて、グーリ・アミール廟内のティムールの墓石には二種類があり、一つは廟の中央に、他の一つは地下の墓室に安置されている。そして、ティムールの亡骸は、地下室の墓石の下にねむっている。⑧ これら二つの墓石のうち、廟の中央を占めるものは、ウルグ・ベクのモグリスターン遠征（一四二四—二五年）の際に、ユルドゥズ河畔のモグール・ハーンの夏營地 Qarshi からサマルカンドに移送された軟玉で作られた平たい長方形の板でおおわれ、地下室のものは、大理石製の、やはり平たい板でおおわれている。そして、そのおのおのには、アラブ語で記されたティムールの墓碑銘が刻まれている。この二つの墓碑銘は、内容的にはほとんど同一であるが、やや長文の、軟玉板に刻まれた銘文には、以下の如く記されている。⑨

これは、トゥメネイ・ハーンの子、アミール・カチュライの子、エルデムチ・バルラスの子、アミール・スグチュエ
 チエンの子、カラチャル・ノヤンの子、アミール・イジュルの子、アミール・イランギールの子、アミール・ボルギ
 ユルの子、アミール・タラガイの子、最も偉大なスルタンであり、最も高貴な可汗であるアミール・ティムール・キ
 ユレゲンの墓である。

チンギズ・ハーンの系譜は、この人物（「トゥメネイ・ハーン」）の所でその本幹より分岐した。そして、このきわ

めて高貴にして卓越せる墓に葬られた最も榮光あるスルタンは、この人物「トウメネイ・ハーン」に出自した。

大汗チンギズ・ハーンは、前述したトウメネイ・ハーンの子、カブル・ハーンの子、アミール・バルタン・バハドウルの子、アミール・イスゲイ・バハドウルの子である。

彼「トウメネイ・ハーン」はアミール・ブズンチャルの子、アミール・ブカの子、アミール・トウトウメネンの子、カイドウ・ハーンの子、アミール・バイスングルの子である。

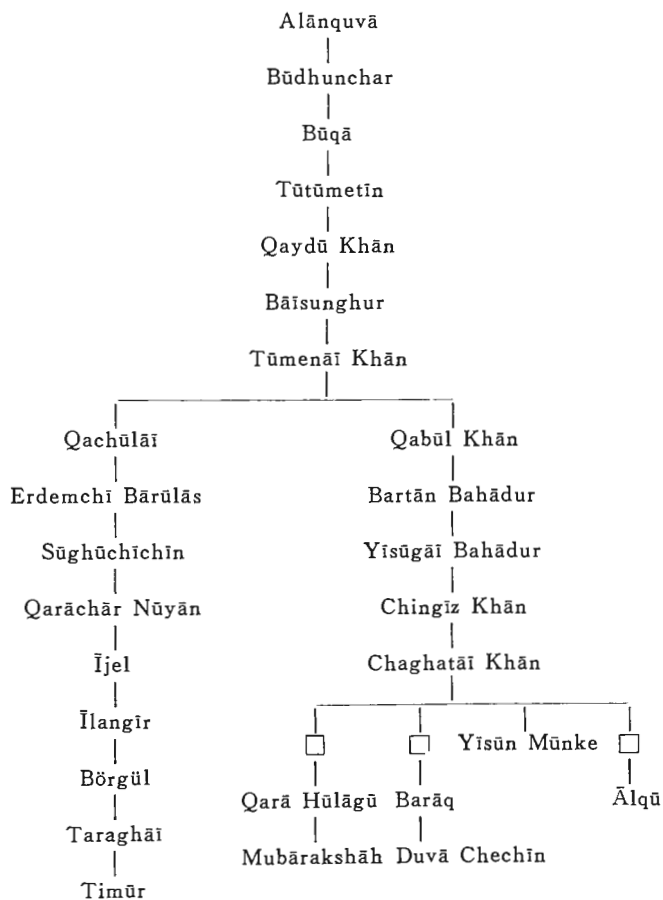
この高貴なる人物「アミール・ブズンチャル」の父は知られていない。ただ彼の母は、アラン・クワーである「事が知られている」。彼女は、生まれながらにして誠實で有徳の女性で、墮落した女性ではなかったといわれる。彼女は、高窓から現われて彼女の中に入った光によってみごもった。そして彼は立派な人間の姿で彼女の前に現われた^④。彼は、信徒らの長、アブー・タリブの子アリーの子孫の一人であるといった。彼女の、常に全てに對して勝利者であつた高貴なる子孫らは、しばしば、彼女のその人物についての「子の父はアリーの子孫であるという」主張の正當性を證明した。

彼「ティムール」は、八〇七年シャールバーン月十四日の夜「西曆一四〇五年二月十五日」逝去した。

いま、この銘文にみえるティムール家及びチンギス・ハーン家の系譜に、以下に述べる傳承に登場するチンギス・ハーンの子孫達の系譜を加えて圖示すれば別圖の如くなる^⑤。

さて、この銘文の最後の部分によると、ティムール及びチンギス・ハーンは、共にイスラムのシーア派の祖アリー・ibn Abi Talibの子孫という事にもなるが、この部分が事實とは無關係の文字通りの附會にすぎない事はあまりにも明瞭であるから、いまは問題としてとりあげない。しかし、この部分をのぞいて、銘文に見える系譜を眞正なものと思なせば、ティムールは、チンギス・ハーンと共通の祖をもつモンゴルの名族の末裔に生まれた事になる。はたしてそれが眞實であるか否かを検討する前に、まずこの系譜に登場する人物達に關する一傳承を紹介しておく必要がある。

ティムール家の系譜



二

ティムール家とチングス・ハーン家の祖先達に関する傳承は、ヤズデイーの『勝利の書』の「序章」*Muqaddima*②
 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㋀ ㋁ ㋂ ㋃ ㋄ ㋅ ㋆ ㋇ ㋈ ㋉ ㋊ ㋋ ㋌ ㋍ ㋎ ㋏ ㋐ ㋑ ㋒ ㋓ ㋔ ㋕ ㋖ ㋗ ㋘ ㋙ ㋚ ㋛ ㋜ ㋝ ㋞ ㋟ ㋠ ㋡ ㋢ ㋣ ㋤ ㋥ ㋦ ㋧ ㋨ ㋩ ㋪ ㋫ ㋬ ㋭ ㋮ ㋯ ㋰ ㋱ ㋲ ㋳ ㋴ ㋵ ㋶ ㋷ ㋸ ㋹ ㋺ ㋻ ㋼ ㋽ ㋾ ㋿ ㌀ ㌁ ㌂ ㌃ ㌄ ㌅ ㌆ ㌇ ㌈ ㌉ ㌊ ㌋ ㌌ ㌍ ㌎ ㌏ ㌐ ㌑ ㌒ ㌓ ㌔ ㌕ ㌖ ㌗ ㌘ ㌙ ㌚ ㌛ ㌜ ㌝ ㌞ ㌟ ㌠ ㌡ ㌢ ㌣ ㌤ ㌥ ㌦ ㌧ ㌨ ㌩ ㌪ ㌫ ㌬ ㌭ ㌮ ㌯ ㌰ ㌱ ㌲ ㌳ ㌴ ㌵ ㌶ ㌷ ㌸ ㌹ ㌺ ㌻ ㌼ ㌽ ㌾ ㌿ ㍀ ㍁ ㍂ ㍃ ㍄ ㍅ ㍆ ㍇ ㍈ ㍉ ㍊ ㍋ ㍌ ㍍ ㍎ ㍏ ㍐ ㍑ ㍒ ㍓ ㍔ ㍕ ㍖ ㍗ ㍘ ㍙ ㍚ ㍛ ㍜ ㍝ ㍞ ㍟ ㍠ ㍡ ㍢ ㍣ ㍤ ㍥ ㍦ ㍧ ㍨ ㍩ ㍪ ㍫ ㍬ ㍭ ㍮ ㍯ ㍰ 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺 㼻 㼼 㼽 㼾 㼿 㽀 㽁 㽂 㽃 㽄 㽅 㽆 㽇 㽈 㽉 㽊 㽋 㽌 㽍 㽎 㽏 㽐 㽑 㽒 㽓 㽔 㽕 㽖 㽗 㽘 㽙 㽚 㽛 㽜 㽝 㽞 㽟 㽠 㽡 㽢 㽣 㽤 㽥 㽦 㽧 㽨 㽩 㽪 㽫 㽬 㽭 㽮 㽯 㽰 㽱 㽲 㽳 㽴 㽵 㽶 㽷 㽸 㽹 㽺 㽻 㽼 㽽 㽾 㽿 㿀 㿁 㿂 㿃 㿄 㿅 㿆 㿇 㿈 㿉 㿊 㿋 㿌 㿍 㿎 㿏 㿐 㿑 㿒 㿓 㿔 㿕 㿖 㿗 㿘 㿙 㿚 㿛 㿜 㿝 㿞 㿟 㿠 㿡 㿢 㿣 㿤 㿥 㿦 㿧 㿨 㿩 㿪 㿫 㿬 㿭 㿮 㿯 㿰 㿱 㿲 㿳 㿴 㿵 㿶 㿷 㿸 㿹 㿺 㿻 㿼 㿽 㿾 㿿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺 㼻 㼼 㼽 㼾 㼿 㽀 㽁 㽂 㽃 㽄 㽅 㽆 㽇 㽈 㽉 㽊 㽋 㽌 㽍 㽎 㽏 㽐 㽑 㽒 㽓 㽔 㽕 㽖 㽗 㽘 㽙 㽚 㽛 㽜 㽝 㽞 㽟 㽠 㽡 㽢 㽣 㽤 㽥 㽦 㽧 㽨 㽩 㽪 㽫 㽬 㽭 㽮 㽯 㽰 㽱 㽲 㽳 㽴 㽵 㽶 㽷 㽸 㽹 㽺 㽻 㽼 㽽 㽾 㽿 㿀 㿁 㿂 㿃 㿄 㿅 㿆 㿇 㿈 㿉 㿊 㿋 㿌 㿍 㿎 㿏 㿐 㿑 㿒 㿓 㿔 㿕 㿖 㿗 㿘 㿙 㿚 㿛 㿜 㿝 㿞 㿟 㿠 㿡 㿢 㿣 㿤 㿥 㿦 㿧 㿨 㿩 㿪 㿫 㿬 㿭 㿮 㿯 㿰 㿱 㿲 㿳 㿴 㿵 㿶 㿷 㿸 㿹 㿺 㿻 㿼 㿽 㿾 㿿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄

も収録されている。ここでは、ヤズデイーによってこの傳承の概略を述べる事にするが、問題の『勝利の書』の「序章」の部分は、從來カルカッタとテヘランで出版されていたこの書のペルシア語テキストには缺如していた。しかし、最近タシケントで出版されたこの書のテキストには、この「序章」の部分が含まれているので、いまそれによって傳承の概略を紹介できる事になった。さて、ヤズデイーの「序章」には、およそ以下の如く記されている。

トゥメネイ・ハーンには、カチュリ、カブルという雙子の息子があつた。ある夜、カチュリはひきつづいて二つの夢を見た。最初の夢では、カブルの襟口から三つの星が次々と出ては消え、四番目に出た星は四界を輝かせ、やがてそれもいくつかの星に分裂して消えた。しかし四界はなおきらきらと輝いていた。ついで見た夢では、カチュリ自身の襟口から七つの星が次々と出ては消え、八番目に最も大きな星が出て世界を輝かせた。その星は、やはりいくつかの星に分裂し、その消滅後も、小さな星々はなお輝きつづけていた。

翌朝、カチュリはこの二つの夢について父のトゥメネイ・ハーンに物語つた。トゥメネイはそれを聞くとよろこんで、カブルをも面前に呼んでその夢解きを語り聞かせた。すなわち、第一の夢はこうである。カブルの三人の子孫がハーンの位につくであろう。しかし、四番目に現われる子孫は世界の征服者となり、彼の子孫らも諸地方を支配してそれぞれ一國のハーンとなるであろう。第二の夢はこうである。カチュリにはつぎつぎと七人の子孫が生まれるであろう。そして第八番目の子孫は世界を征服し、彼の子孫もまた、それぞれ一國のハーンとか一地方のシャーとなるであろう。

トゥメネイ・ハーンはこの様に夢解きを語り聞かせると、カブルとカチュリに次の如き約束をさせた。すなわち、「ハーン位 *takht-i khāni* はカブル・ハーンのものである。軍事と行政 *shanshir va hukmrāni* はカチュリに委任される」。かくて、子子孫孫に至るまで、この約束をまもるべき事が遺言され、その文言をウイグル文字でしたためてそれに両者が署名した。父のトゥメネイも、自らの紅印 *ni tamgha* をその上におし、この誓約書 *'ahd nāma* は

ハーンの寶庫に收藏された。^㉔

この時とりかわされた誓約書はその後も效力を持ちつづけ、カチュリがカブル・ハーンを輔佐したのを手はじめに、つづくエルデムチはバルタン・バハードゥルを輔佐して、その一族にはバルラスの名が與えられ、彼はエルデムチ・バルラスと呼ばれた。^㉕ つづくイスゲイ・バハードゥルの時代には、スグ・チェチェンが彼を輔佐し、さらにイスゲイに一子が生まれると、スグ・チェチェンの助言に従ってこの子にテムチンという名をつけた。五六二年、亥の年〔西曆一二六七年〕テムチン十三歳の年に父イスゲイが歿すると、政務と軍事の責任者であつたスグ・チェチェンも數日後に他界した。諸部はテムチンにそむき去り、バルラス部もそむいた。^㉖

しかし、ひとりカラチャルはテムチンに加わり、これを輔けた。カラチャルの助力を得て、やがてテムチンは即位してチンギス・ハーンと號した。^㉗ チンギス・ハーンはその死を目前にして、息子達、兄弟達、そしてカラチャルを前に呼んで、オゴタイを後繼者に指名した後、先のカブル・ハーンとカチュリの間の誓約書を寶庫より持參させ、これの文言を再確認させた。そして二男のチャガタイにカラチャルをつけ、王國の諸事と軍隊の支配を委任した。^㉘ チンギス・ハーンの歿後、カラチャルはチャガタイを輔佐し、その歿後も、カラ・フラグ、イスン・ムンケ、ついで再びカラ・フラグをチャガタイ・ウルスのハーン位につけ、六五二年〔一二五四〇五年〕八十九歳で他界した。^㉙

カラチャルの子イジェルは、アリク・ブハの亂にチャガタイの孫アルグの軍に加わり、ついでムバラク・シャーがアルグに代つてハーン位につくのを助けた。イジェルは、バラークの即位式に當つても、ハーンの爲に盃をささげ持った。しかし、バラークの統治時代に、イジェルはチャガタイ・ウルスを去つてアゼルバイジャンに行った。^㉚

バラークの子、ドゥワの統治時代には、イジェルの子、イランギールとドゥワの間で先の誓約書が再更新された。^㉛ しかし、この先祖達から傳えられた誓約書は、オゴタイ家出身のアリー・スルターンがチャガタイ・ハーン of イスン・ティムールに反亂し、ハーンの寶庫を略奪した際に破損されてしまった。^㉜

さて、夢解きを發端とするこの傳承によれば、先の系譜に登場したティムール家の先祖達は、カチュリとカブルの間でとりかわされたという誓約書の文言に従って、常にチンギス・ハーン家のハーン達を輔佐するきわめて重要な地位を保ちつづけていた事になる。しかも、この「ウイグル文字」で書かれ、トゥメネイ・ハーンの紅印の捺された誓約書は、その後も、チンギス・ハーンとカラチャル、ドゥワとイランギールの間で改めて確認しなおされたものという。

はたして、この傳承の傳える如き事實が存在したのか否か、また系譜に登場する人物達が實在の人物達であるか否かについては、モンゴル時代の諸史料を参照する必要がある。

さて、まず誓約書の問題についていえば、そのような誓約が爲され、かつそれについての文書が作成されたという記録は、モンゴル時代のいかなる史料にも見出す事ができない。それに加えて、ティムールの生存中に編纂されたニザーム・アッディーン・シャミー *Nizām al-Dīn Shāmī* の『勝利の書』*Zafar nāma* など、ティムール朝初期の諸史料^⑤にも、これについての記録は全く見あたらない。つまり、傳承の中核を爲す誓約書の作成とそれが後世にまで及ぼした大きな効果についての物語は、ティムールの歿後二十年、ティムールの子孫が君臨するティムール王朝の一宮廷において編纂されたヤズディーの書に、全くはじめて現われるものにすぎない^⑥。この事實は、この傳承の中核を爲す部分が、ティムールの歿後、ティムール朝の宮廷において作り出された架空の物語であつた事を推定させる十分な根據となる。

しかしながら、この傳承及び系譜の全てが架空の物語であつたわけでもない。その中には、若干の史實も含まれている。例えば、すでにシャミーは、

さて、彼「[ティムール]」の高貴なる家系は以下の如くである。強大なる君主チンギズ・ハーンが息子達に言葉を下された時、その二男チャガタイ（彼はヤサク *Yasak* とかヨスン *Yusun* において他の息子達よりぬきん出ていた）に特別に眼をかけ、自分の軍隊の精銳の中から一團を選び與えた。その一團の長がバルラス部のカラチャルであつた。そして、かの強大なる君主は、國事、ヤサク及びヨスンの掌握を彼の知慧と知識とに委ねていた。これが、この

アミール・サーヒブ・キラーン Amir Sahib Qiran (「ティムール」の偉大なる祖先である。さて、かの強大なる君主の先見の明と賢明なる思慮とは、時を経て今日に至り明らかとなった。すなわち、アミール・サーヒブ・キラーンは、不和と混乱の後に、諸國に秩序と統一をもたらし、チャガタイの祝福された一族をイラーンとトゥーラーンの王國において、いやそればかりか大部分の諸地域において、王權と王國の所有者たらしめたのであった。^⑤とか、あるいは

チンギズ・ハーンは兵の分割に當つて彼「[「チャガタイ」]に數千人の騎士を與えた。その長はバルラス部出身のカラチャルであつた。これが、このアミール・サーヒブ・キラーンの偉大なる祖先である。

と述べて、^⑥ティムールの祖先としての、バルラス部のカラチャルの名を特記している。そして、このカラチャルと、その父スグチェチュンについては、『元朝秘史』にも、ジャムカと別れたテムチンのもとに、

バルラス部からはスク・セチン Sugu Sečen が、カラチャル Qaračar という子供と共に來た。

と見え、^⑦彼等の父子關係と、創業期のチンギス・ハーンとの交流をうかがう事ができる。ただし、スグチェチュンが、イステイ・バハードウルを輔けて重要な働きをしたとするのはもとより「傳承」のみの傳える事實であり、これを史實として認める事は不可能である。また、「系譜」及び「傳承」は、このスグチェチュンをエルデンチ・バルラの子であつたというが、ラシード・アッディーンの『集史』 Jamī' al-Tawārikh のトゥメネ・ハーン紀は、

第三子はカチュリ Qāchulī だ、バルラス部は彼の一族である。その長子はエルデンチ・バルラ Erdenchī Barūla だ、その長子はトゥダシ Tūdan、その長子はジョチエ Jūchi'a、その長子はブルカン・カルジャ Bulūqān Qalja だ、彼はチンギス・ハーンの諸子の親族であつた。

と異なつた系譜を收録しており、^⑧スグチェチュンはバルラス部の長子の系譜には登場しない。ただし、『集史』にその名のみが右の如く記されているカチュリ及びエルデンチ・バルラは、『元朝秘史』にも、やはりバルラス部の祖として、

合出刺 Qačula 及び額兒點圖巴噶刺 Erdemti Barula として記載されている。^⑤ 右の『集史』に、エルデンチ・バルラの子として見えるトゥダンは、『秘史』の脫朵延巴噶刺 Tödöen Barula に相違ない。つまり、スグチエチェンが、確かにエルデンチ・バルラの子であった事を證明するモンゴル時代の史料は存在しないが、彼がバルラス部の首長の一人として、即位以前のチンギス・ハーンの軍勢に加わった事だけは、史實として確定できる事になる。^⑥

さて、ここで再びカラチャルにもどると、彼が一二〇六年、モンゴル高原の統一に成功したチンギス・ハーンによって、九十五功臣の一人に數えられ、かつまた、バルラス部の千戸長として、その部民と共にチンギス・ハーンの次子チャガタイにつけられた事についても、『秘史』及び『集史』に記述がみられる。^⑦ ただ先の「傳承」には、カラチャルが、チャガタイ・ウルスにおいて雙ぶ者のない絶對的な權威を保有していた如くに記されているが、それを明瞭に示すモンゴル時代の史料は何一つ残されていない。むしろ、モンゴル時代の史料に、チャガタイ・ウルスの重要人物として登場するのは、ハバシハ・アミード Habash 'Amid とか、マフムード・ヤラワチの子マスード・ベク Mas'ud Beg ibn Mahmūd Yalavach らの中央アジア出身の人物達である。それでは、カラチャルは、チャガタイ・ウルスにおいて如何なる立場にあったのか。これについては、ナタンズィー Natanzi が、チャガタイの子カラ・フラグの治世について、次の如く記しているのがきわめて興味深い記録である。^⑧

「カラ・フラグは」ワズィール權 wizarat をヤラワチの子マスード・ベクに委ね、ハーン家内部でのアミール權 imārat dar khāne-yi khod をカラチャル・ノヤンに與えた。

つまり、この記述によれば、チャガタイ・ウルス内でのカラチャルの立場は、あくまでハーン家内部の諸問題のみをとり扱う、いわば「王傳」の立場であり、ウルス全體の行政・財務等を取り扱うワズィールとしての權限は、中央アジア出身の行政官の手中に握られていた事になる。とすれば、「誓約書」の文言に従って、ウルス内の行政・軍事の全權を委ねられていたとする「傳承」の記述は、もとより誇張以外の何ものでもないであろう。しかし、カラチャルの名が、すでに

シャミーにもティムールの祖先として記載されている所から考えれば、ティムールの在世中から、カラチャルがその祖先と考えられていた事は、まず間違いないであろう。

さて「系譜」及び「傳承」によると、このカラチャルにイジェルという子があつたという。そして、これが史實である事を證明したのは、トルコのトガンの功績であつた。すなわちトガンは、ラシードの『集史』の諸寫本に、

この部族〔「バルラス部」〕出身の二人の高名なアミールが、テギュデル Tegyder〔「チャガタイ・ハーンのバラク Baraq の兄弟」〕と共にこの國〔「イル・ハーン國」〕に来ていた。彼等の名は……とコクチュ・バハードウルであつた。

そして、このコクチュ・バハードウルは知慧と才能と有辯とではまれ高かつた。

とか、またチャガタイに與えられた四千人の部民の内容を述べた所で、

バルライ・カラチャルの千戸。彼はバルラス部の出身であつた。そして彼の息子達〔の一人〕は、大アミールとしてアバカ・ハーンに仕えた。アバカは彼を寵愛した。テギュデル・オグルと共に遊牧していた。彼の名は……である。

とか記された部分のブランクの部分（「……」で示してある）に、「イジェル・ノヤン」の名をおぎなうべき事を、イスタンプールのトプカプ・サライ圖書館所藏の『集史』の古寫本によつて確定する事に成功した。従つて、カラチャルの子イジェルが、「傳承」の述べる如くチャガタイ・ウルスを去つて、イル・ハーン國の領内で活躍した事は、史實として確定できる事になる。ただし、彼のチャガタイ・ウルス内での、「傳承」の傳える如き活躍ぶりを傍證するモンゴル時代の史料は、何一つ残されていない。

さて、「系譜」及び「傳承」によると、このイジェルの子がイランギールという者で、彼とドゥワとの間で、「誓約書」が更新されたという。しかし、この人物の活動を傳える史料は、他には全く存在しない。そして、この實在すら確定できぬ人物の子がボルギェルで、これがすなわちティムールの祖父に當るといふ。しかし、このボルギェルについても、ヤ

ズデイー及びその系統の史料以外に、その活動を伝える史料は全く存在しない。つまり、「系譜」及び「傳承」に、ティムールの祖父及び曾祖父として登場する二人の人物は、この架空の物語を含む傳承の中にしか、その實在性を證明する手だてを持たない事になる。それに加えて、ティムールの祖父の名を、ボルギェルではなく、アバガイ *Abaghai* と伝える史料もある。^⑤

この様に見て来ると、ティムールの曾祖父及び祖父として、イランギールとボルギェルを他の史料によって確定する事は、現在のところ不可能であるといわなければならない。このボルギェルについて、ヤズデイーが「序章」の中で、

彼「[[イランギール]]」から一人の息子が残された。ボルギェルという名である。彼には二人の息子があった。アミール・タラガイとアミール・ハスタバ *Amir Hastaba* である。^⑥ アミール・タラガイはサーヒブ・キラーン陛下の父である。

とその名のみを擧げて、その活動について何も述べていないのも、特記すべき事柄が何もなかった事情の反映ではなからうか。

これに對して、ほとんど全ゆる史料によってティムールの父として確定しうるタラガイについて、ヤズデイーは先の記事につづけて、

アミール・タラガイの全ての注意は、ムスリムの道の強化・向上と、ムスリムらの保護・愛育にむけられた。政治の庭を閉じて、學者との交りにむかい、彼の高められた集いは、敬虔な人々や、ダルヴィシユ達の集りであつた。

と述べ、^⑦ 彼が政界より引退して、もっぱら學者達との交わりや、敬虔なムスリムとしての宗教的生活に専念していた事情を説明している。もつともヤズデイーは、『勝利の書』の本章の最終章で、

かの陛下「[[ティムール]]」の父アミール・タラガイと、祖父アミール・ボルギェルは、特別のウルス及び萬戶 *mans* *va tuman-i khassa* 「バルラス部」^⑧ の榮譽あるアミール權と支配權、統治權と首長權を放棄して、それをいとこ達

abnē-yi a'mām に委譲していた。

と述べ、タラガイのみならず、ボルギールもまた政治生活より引退していたかの如くに記す。しかし、おそらくこれは、タラガイの生活ぶりを、その父親の代まで引きのばした記述にしかすぎないであろう。なおまた、この記事によれば、タラガイは、榮譽あるバルラス部の首長としての地位をつぐ權利を所有する有力者であった事になる。しかし、その様な事實は、シャミーなどティムール朝初期の歴史家達によつては全く述べられていない。従つて、ヤズデীরティムールの祖先達についての誇張した記述の様式から考えれば、これまた、事實と相違する、誇張された記述である可能性が強い。現在のところタラガイについていえる事は、彼がチャガタイ・ウルス内で、ほとんど重要な政治的役割を演ずる事なく、もっぱら一私人として敬虔なムスリムとしての生活を送っていたという事のみであろう。

この事情は、ティムールの祖父及び曾祖父の時代においてもおそらく同様であつたように思われる。何故ならば、先に見た如く、系譜に登場する人物達の内、ティムールより遠くはなれたカチュリよりイジェルに至る五世代の人物達は、それぞれ、それぞれの時代の歴史書に残る何らかの働きをして來た人物達であつた。それに對して、彼らよりティムールに近い世代に屬するイランギールとボルギールは、その同時代の史料に全く姿を現わさない。そのみでなく、ティムールにより近い世代の人物達であるにもかかわらず、彼等についての記述は、かの「傳承」の中ですらかえつて遠い世代の人物達のそれよりもおぼろげにすらみえる。これはとりもなおさず、彼等の世代に至つて、ティムールの祖先達がチャガタイ・ウルス内での昔日の重要な地位を失つていた事を意味するのではなからうか。ティムールの祖父が、ボルギールではなくアバガイと呼ばれたにしても、事情は全く同じであつたにちがいない。要するに、ティムールは、遠い祖先はともかくとして、その近い祖先らの中にはさしたる働きをした人物達を全く持たなかつた事になる。

さて以上は、もっぱらティムール朝の宮廷史料と、モンゴル時代の史料によつてティムールの出自をめぐる問題を取扱つたが、ここで眼を轉じて、ティムールと直接面識のある四人の外國人達の、この問題についての記録を紹介したい。

まず、スペインの使節クラビホ *Ruy González de Clavijo* の記録を紹介する。クラビホは、スペインのエンリケ三世の使節として、一四〇三年五月二十三日、サンタ・マリア港を出発、一四〇四年九月八日、サマルカンドにおいてティムールに會見し、一四〇六年三月七日、サン・ルーカル港に歸着した。そして歸國後に、その旅行中の見聞をまとめて『偉大なるタモルランの生涯と所業』を著した^⑧。この書の中でクラビホは、ティムールの出自と青年時代にふれて、

しかし、タムルベク *tamurbeque* の父は、このチャカタイ族に血のつながる良家の出であつたが、三〇四人の騎士を持つのみの小身であつた。彼はこの町〔「ケシ」〕のはずれの村に暮らしてゐた。彼の如く良家の者は、村とか草原に暮らすのを好み、町に住むのを好まなかつた。彼の息子も同様であつた。それ故に、彼もはじめは、その手もとに四〇五人の騎士しか持つてゐなかつた。〔中略〕そして、この四〇五人と共に、ある日は羊を、ある日は牛をと、必ずその地方で盗んでゐたという。

といい、ティムールがチャガタイ族の出身ではあるが、はじめは、四〇五人の部下と共に附近の家畜の盗みに従事してゐた事を伝え、さらにつづけて、彼がやがて三百人ほどの騎士を従えて、諸地域で略奪に従事し、ついで五百人ほどの騎士と共にイランのシースターンに羊や馬を略奪に出かけた際に、シースターン人の攻撃にあつて生涯の跛者となり、同時に右手の小指と次の指をも失つたと述べる^⑨。

クラビホがその旅行記の中でチャガタイ族と呼ぶのは、チャガタイ・ハーンと共にモンゴリアより中央アジアに移住し、やがてトルコ化したモンゴル人達、すなわち本來のチャガタイ族の他に、チャガタイの歿後、新たにチャガタイ・ウルスの構成分子として加入したモンゴル人達、さらに、これらの人々の持った社會的優越性の故に、自らチャガタイ族を稱するに至つた中央アジアのトルコ人達をも含む。つまり、クラビホは、同じチャガタイ族とはいつても、その來歴から

すると、當時三つのグループが存在した事を記録している。^⑤ クラビホがティムールについて述べるチャガタイ族とは、この内の第一のグループに属する者達の事であった。^⑥

従って、クラビホによれば、ティムールは明らかに、かつてチャガタイ・ハーンに従って中央アジアに移住したモンゴル人の子孫ではあったが、その父も、また彼自身も、ごく少數の部下しか持たず、そのため彼自身ははじめ盗みによって生計を維持していた事になる。

この事實は、一四〇三年五月に、ティムールのフランス王シャルル六世あての書簡をたずさえてパリの宮廷に到着し、同時に、中世フランス語で書かれたティムールに關する『記録』*Mémoire*を残したイタリア人ジャン・ジャンの記述にも見られる。^⑦ このジャンなる人物は、ドミニコ會説教者兄弟團 *ordre des frères précheurs* の僧侶で、アルメニアのナフチ・ワーン *Nakhchuvân* にあった教團の司教の職を経て、一三九八年から、イランのスルターニーヤ *Sulṭāniyya* で教團の大司教の地位についていた人物である。^⑧

彼は、その『記録』の中で次の如く述べている。^⑨

この君主〔テミル・ベイ *Temir Bey*〕ははじめは低い地位の者で、名聲もなく、部下としては十人しか持っていない。なかつた。彼は、よい血すじの一族の出身ではあつたが。

さて彼の青年時代には、その賢さと惡知慧とで、自分の配下に七人の他の若者達を持っていた。そして専制者的なやり方で、繁榮への道を歩み始めた。家畜その他を略奪・強奪する盜賊行爲によつて勢力を増し、やがてそのまわりには四十人の仲間ができ、それから馬や家畜、城や土地を略奪・強奪しはじめたという。そして、この様にして、仲間の間で非常に勢力を増し、やがて力ずくで避難のための城を手に入れて、そこに全ての掠奪品や盜品を置いた。そして、日に日に城や村や土地で勢力を増大した。

また彼は、

彼の出自についていえば、彼は東部のタルタル人で、その民はヨカテ locate (「チャガタイ」と呼ばれる。

と述べる。つまり、ジャンもまた、ティムールが、チャガタイ族の出身ではあったが、青年時代には、もっぱら盗賊としての生活を送っていた事を記録している。

一方、一四〇一年のティムールのダマスカス攻撃の際に、母、兄弟と共にティムール軍の捕虜となり、サマルカンドで少年時代をすごした後、クリミアを経てエディルネ Edirne に來たり、オスマン朝のスルタン・メフメト一世に仕え、ついで故郷に歸ってここにしばらく滞在した後、カイロに移住し、この地で『ティムールの生涯における運命の不思議』 *‘Ajāz al-maqdūr fī aḥbār Timūr* を著わしたイブン・アラブシャー Ibn ‘Arabshah は、前述の如くティムールがアバガイ Abaghāi の子タラガイ Taraghāi の子として、ケシュの町に近いホージャ・イルガル Khwāja Ighār の村に生まれたという貴重な記述を残すと同時に、ティムールとティムールの父が、理性も宗教も持たぬ遊牧民であったとか、ティムールの父が非常にまずしい靴屋で、ティムール自身も、きわめてまずしく、その爲に盗みを働き、この盗みの際に番人の射た矢を肩と臀部に受け、その結果、彼は貧困に加えて、身体的な障害をも持つに至ったのであるとか、そうではなくて、彼の父はスルタン (「スルターン・フサイン」) のもとでアミールとして賢さと知恵とで有名であったとかのティールの出自に關する諸説を述べた後に、

最も確かなのは、前述の彼 (「ティムール」) の父タラガイは、スルトンの宮廷の高官の一人であった。そして私は、『ムンタハブ』 *Muntahab* というペルシア語の歴史書の「附録」 *dhayl* ——この書は創世よりティムールの時代までを扱っている。これはすばらしい事である——の中で、ティムールの系譜が、惡魔のわなたる女性達を通じてジンギーズ・ハーンにまで連なっているのを見た。彼は、マー・ワラー・アンナフルを征服し、同等者達の上位に位した際、王達の娘達と結婚した。それで人々は、彼の名にキューレゲンという稱號を加えた。これはモグール語で女婿を意味する。彼は王達の親族となったので、彼等の宮廷で權力と地位を得る事になった。

という。^⑤ イブン・アラブシャールが見たというペルシア語の歴史書の附録が、何を指すかは不明であるが、彼が「最も確かな」事として述べる父タラガイについての記述は、先の宮廷史家ヤズデーの記す政治生活からの引退者としてのタラガイの像とは一致せず、むしろ、彼が、ティムール自身について、きわめて貧しく、その爲に盗みを働き、それによって終世の傷を受けるに至ったとする記述の方が、より貴重な報道であるように思われる。彼はまた、この書物の別の箇所では、ティムールがシースターンで羊を盗もうとして、羊飼の射た矢をその太ももと肩に受け、以後その身體に障害をせおうに至ったという傳聞をも記録している。この記録は、先のクラビホの記述とも一致し、ティムールの身體障害の原因に關する真相を傳えたものとみなす事ができるであろう。ティムールが、その政權獲得以前に、盜賊團の首領をしていたという記録は、アルメニア人トーマス Thomas de Medagh の残したティムール傳にも明瞭に傳えられている。^⑥

一方、イスラム世界の生んだ最大の思想家イブン・ハルドゥーン Ibn Khaldūn も、またティムールに關する直接的な記録を残している。一四〇一年一月、ダマスカスにおける彼とティムールとの會見は、ティムールの生涯を彩る最も劇的な一場面であつた。イブン・ハルドゥーンはティムールと會見する以前から、この東方に出現した征服者になみなみならぬ關心をよせ、カイロに到着する商人達から彼に關する傳聞を細大もらさず蒐集し、それにもとづいて一卷の「ティムール傳」を書き上げていたという。もともと、この傳記は、あくまで傳聞のみにもとづいたものであつたから、その中に多くの誤りを含む事をイブン・ハルドゥーン自身が自覺していたという。そのため彼はティムールと會見した際に、この傳記をティムールの面前で讀み上げ、その中に含まれる誤りを、ティムール自身に訂正してもらふ機會をも得たという。^⑦ そして、彼がかくも絶大の關心をティムールに寄せた理由は、彼の歴史理論の中核をなす「連帶的忠誠心」*‘asabiyya* にもとづく新王朝の誕生を、ティムールとそのひきいるチャガタイ族の中に見出だそうとしていたからに他なるまい。^⑧

さて、イブン・ハルドゥーンは、ティムールの父の名がタラガイで、また彼がチャガタイ族の出身である事を知っていた。^⑨ さらにハルドゥーンは、ティムール自らが、自分は君主ではなく、あくまでその代理人にすぎない事、さらにま

た婚姻を通じての君主達の親族にしかすぎない事を述べたと記録している。すなわち、これによれば、ティムールがイブン・ハルドゥーンにむかってことさらに自らの家系を誇った事もなく、ただ彼に自らの置かれている立場を正確に語り伝えようとしたのみである事がわかる。

さて、以上の外國人達の記録は、まずティムールが、もともととはチャガタイ族の、しかも「良家」「よい血すじ」の出身者であつた事を證言している。そしてこの證言は、先のティムール家の系譜の信憑性を、消極的にはあれ、支持するものと考えられるであろう。すなわち、先の系譜そのものの中に何ら明瞭な内的缺陷を發見できない以上、この系譜を、バルドリドの如く、後世の偽作とみなさねばならぬ理由は全くなく、従つてティムールは、系譜も物語り、そしてトガンもそれを支持した如く、確かにもとはモンゴルの名族の出身であつたとみなす事ができる。

しかしながら、右の外國人達の記録は、同時に、ティムールもその父も、わずかに少數の部下を持つものの「小身」であつた事を證言し、かつまた、ティムール自身がその青年時代を盜賊として過ごさねばならなかつた事實をも指摘している。これらの證言は、かの輝やかしい系譜が、ティムール自身にとっては、その生涯への出發點にあたつて、何の支えにもならなかつた事情を物語っているように思われる。これらの記録に、ティムールの祖先達についての言及が全く見られないのも、祖先が誰であるかという事が、ティムールにとっては、ほとんど意味を持たなかつた事情の反映でもあるろう。すなわち、ティムールは、前節でも一應の結論を述べた如く、その近い世代の祖先達の中に、重要な政治的活動を演じた人物を全く持たず、自らの實力のみによつて、世界征服者への道をきりひらいていったものと思われる。そして、その苦難の道程において、着々と、當時の社會においてまさしく實質的な意味を持った自らの立場を固めていったものと思われる。

その立場とは、イブン・ハルドゥーンによつても記された如く、まず第一には表面上は君主、すなわちハーンの代理人としての立場であつた。よく知られている様に、ティムールは、一三七〇年、仇敵アミール・フサインに對して敢行され

最後の遠征の陣中で、オゴタイ・ハーン家のソウルガトミシヤ Soyurghatmish をハーン位に推戴し、一三八八年彼が病歿すると、その子スルターン・マフムード Sulṭān Maḥmūd をその位につけ、自らは、本来彼の家系が所有していたと思われるアミールないしベクとしての身分とサーヒブ・キラーンという稱號に甘んじた。そして、これらのハーン達の名を貨幣にほりこみ、また金曜日の禮拜時におけるフトバ khuṭba にも、彼等の名を讀みこませた。この、ティムールのチンギス・ハーン家の血に對する態度は、また彼のチンギス・ハーンの血をひく女性達に對する態度にも明確に表明されている。すなわち、ティムールは、一三七〇年、仇敵アミール・フサインをバルフに破り、マー・ワラー・アンナフルにおける最高の實力者としての地位を獲得すると、フサインの後宮からカザン・ハーン Qazan Khān の娘サライ・ムルク・ハーン Sarāi Muḥk Khānīm をめとって、キュレゲン kürügān すなわちハーン家の女婿としての立場を獲得した。さらに一三九七年には、モゴリスターンのヒズル・ホージャ・ハーン Khidr Khwāja Khān の娘テケル・ハーン Tūkal Khānīm をめとって、そのキュレゲンとしての立場を強化した。そしてこの立場が、ティムールのハーンの代理人としての立場をより正當化する第二の立場に他ならなかった。彼がいかに、このキュレゲンとしての立場を重視していたかは、彼がフランス王シャルル六世にあてたペルシア語書簡の冒頭に、「大アミール、ティムール、キュレゲン」 amir-i kabir Timur Kurān といひ、また中國の明朝に對しても「駙馬帖木兒」と稱し、またその貨幣にも、ハーンらの名と並んで「大アミール、ティムール、キュレゲン」 amir-i 'aẓam Timur kürügān と誇らしげにほりこんでいる事からも明らかであろう。先のイブン・アラブシャールとイブン・ハルドゥーンが、このキュレゲンとしてのティムールに言及しているのも、この地位が當時の社會でもついていた重要性を反映したものに相違ないであろう。

四

ティムールが活動を開始した十四世紀の中葉、中央アジアは政治的混沌のただ中であつた。そこには、統一的君主の名

に値する者は存在せず、十二と十五と数えられる封建領主達が、絶え間のない政治闘争をくりかえした。そしてその社會では、モンゴルの遺産たるチンギス・ハーン家の血の重みを除いて、高貴なる家系も、誇るべき身分も、もはや昔日ほどの意味を持ちえなかった。

カラチャルに代表される高貴なるバルラス部アミールの末裔に生まれたティムールにとつても、事情は同じであつたに相違ない。すでにその曾祖父の時代から、彼の家系の持つた重要性は意味を失ひ、曾祖父も祖父も、そしてまたその父も、もはやチャガタイ・ウルスの主要な政治的舞臺に登場する事はなかった。

かくして、實力ある者のみが社會の上層部へと進出しうる混亂の世に、はじめは少數の、そしてやがては數百の、怖れを知らぬ者達から成る盜賊團の首領として、ティムールはその活動を開始した。そして幾多の困苦の後に、マー・ワラー・アンナフル唯一最高の實力者となりおおせたティムールにとつて、その權力をかざるにふさわしいものは、意味を持たぬ一片の系譜ではなく、ハーン家出身の傀儡ハーンと、ハーン家の女婿としての地位と、建設され始めた新たな安定社會における、新たな支配階級としてのアミールないしベクの身分であつたに相違ない。

しかし、榮光に輝くティムール王朝の、生まれながらの公達たる彼の子孫等においては、事情はいちぢるしく異なつた。榮光につつまれた彼等が必要とされたのは、盜賊としての日々をも過ごさねばならなかつた王朝創設者の實録ではなく、あくまで榮光に満ち満ちた祖先等の物語であつた。かくして、ティムール在世中には決して問題にされる事のなかつたティムール家の系譜が、架空の誓約書を中核として含む傳承を伴つて、再びほこりの中からとり出され、宮廷史家の麗筆によつて諸史料に書き残された。そして、この自家の系譜に對するティムールとその子孫らの態度の相違は、おそらく、彼等の生きた時代、すなわち亂世と平和期という二つの時代相の反映に他ならないであらう。

註

- ① ティムール家の「系譜」を眞正のものとみなす説の代表者は トルコのとガンで、彼は「アミール・ティムールの系譜の檢證」

- と題する論文をペルシア語で發表しようとす。Z. V. Togan, "Taḥrīq-i nasab-i Amīr Tīmūr," *Armagān-i 'ilmī bi-khidmat-i Profēssor-i Doktor-i Muḥammad Shafī*, ed. Sayyid 'Abd Allāh, Lahore, 1955, pp. 105—113. 彼等が説き『一般トルコ史入門』の中で述べている。A. Z. V. Togan, *Umumi Türk Tarihine Giriş*, I, Istanbul, 1970, p. 64. 以下に對し「系譜」を後世の偽作とみなす説の代表者である「ペルシア」の彼の理解はトルコの歴史に於ける。W. Barthold, *Turkestan down to the Mongol Invasion*, 3rd. ed., London, 1968, p. 53; В. В. Бартольд, "Место Прикаспийских областей в истории мусульманского мира," *Академик В. В. Бартольд. Сочинения*, Т. IV, Москва, 1966, стр. 741—42.
- ② テーリ・ヌーン廟のキヤートルの墓石に、そこに記された銘文にのこる「ロマニ・バハ」の語句がある。E. Blochet, "Les inscriptions de Samarkand," *Revue archéologique*, 3e Série, t. XXX, Paris, 1897, pp. 67—77, 202—231; A. A. Семенов, "Надписи на надгробиях Тимūra и его потомков в Гур-и Эмире," *Эпиграфика Востока*, II, Ленинград, 1948, стр. 49—61.
- ③ *Mu'izz al-Ansāb fī shajarat salāṭin toghūl*, MS. Bibliothèque nationale, Ancien fonds persan 67, 6b, 7a, 81b, 94b, 96b.
- ④ Sharaf al-Dīn 'Alī Yazdī, *Zafar nāma*, ed. A. Urunbayev, Tashkent, 1972, 83b.
- ⑤ Col. Miles (tr.), *The Shajrat ul Atrak, or Genealogical Tree of the Turks and Tatars*, London, 1838, pp. 55, 58, 358, 366—367, 380.
- ⑥ Mīrkhwānd, *Rawdat al-Safā*, VI, Tehran, 1339, p. 4.
- ⑦ Khwandamīr, *Nabdh al-Siyar*, III, Tehran, 1333, p. 392.
- ⑧ 一九四一年五月六月「テーリ・ヌーン廟のキヤートルの墓が調査され、そこに葬られた屍骸が明らかにキヤートルのものに相違ない事が證明された。そして、その頭蓋骨から、彼の頭部が復原された」とす。M. M. Герасимов, "Портрет Тамерлана. Опыт скульптурного воспроизведения на краинологической основе," *Краткие сообщения о докладах и полевых исследованиях Института истории материальной культуры имени Н. Я. Марра*, XVII, Москва-Ленинград, 1947, стр. 14—21.
- ⑨ В. В. Бартольд, "Улутбек и его время," *Сочинения* II-2, Москва, 1964, стр. 110.
- ⑩ E. Blochet, "Les inscriptions", pp. 71—73; A. A. Семенов, "Надписи," стр. 57—58.
- ⑪ この「そして彼は立派な人間の姿で彼女の前に現れた」fa-tamaththala la-hā bashraṇ asawīyyan は『コーラン』十九章十七節よりの引用である。「ロマニ」はこれを「父に似た姿で」susūyyan aban と讀んだが誤りである。なお「フラン・コフが高窓から入った光によってみえまった」というのは、あなづき名高しヤンケルの始祖語である。
- ⑫ 表中の Tātūmetān と Tātūmetān はより正確に

る。『Zafar nāma』の「序章」は『Ilāqiz』と見えてゐる。

- ⑬ 同様の記述は、ティムールの第三子「ラーン・シャー Mirānshāh」の墓石の銘文にも見えてゐる。Blochet, "Les inscriptions," pp. 75—76.

- ⑭ Yazdi, *Zafar nāma*, ed. A. Urunbayev, 24a—25a, 26a, 26b—27a, 28b, 61a—61b, 77a—77b, 78a, 79b, 81a.

- ⑮ Miles, *Shajrat*, pp. 55—58, 61—64, 68—69, 72, 74, 76, 78—79, 89, 344—346, 353—356, 358—359, 366—367, 373.

- ⑯ Mirkhwānd, *Rauḍat al-safā*, V, pp. 26—27.

- ⑰ Khwāndamīr, *Habīb al-siyar*, III, p. 14.

- ⑱ *The Zafarnāmah by Maulānā Sharjuddīn 'Alī of Yazd*, ed. Maulawī Muḥammad Ilāhdād, 2 vols., Calcutta, 1885—88; *Zafar nāma*, ed. Muḥammad 'Abbāsī, 2 vols., Tehran, 1957.

- ⑲ 「序章」は『勝利の書』全體の約五分の一を占め、ウルンバイエフの出版したウスベク共和国科學アカデミー東洋學研究所所藏の寫本では八十三葉である。この部分が通行の諸寫本に缺如しているのは、おそらく人々の興味が本章のみにむけられた結果であらうとウルンバイエフは推定している。註④所引の『勝利の書』の編者序文參照。

- ⑳ *Muqaddima*, 24a—25a.

- ㉑ *ibid.*, 26a.

- ㉒ *ibid.*, 26b—27a.

- ㉓ *ibid.*, 28b—29b.

- ㉔ *ibid.*, 61a—61b.

- ㉕ *ibid.*, 77a.

- ㉖ このチャガタイ・ハーンの名は、しばしばボラーク Borāq と綴られて來たが、これはインリーク Barāq (「毛皮の着く衣」を意味するペル語)と綴られてゐるもので、G. Doerfer, *Türkische und Mongolische Elemente im Neupersischen*, II, Wiesbaden, 1965, SS. 280—281 參照。

- ㉗ *Muqaddima*, 77b—78a.

- ㉘ *ibid.*, 79b.

- ㉙ *ibid.*, 81a. なお、フリー・スルターンの反亂は三三三—三三九年頃の事とされてゐる。E. E. Oliver, "The Chaghatai Mughals," *Journal of the Royal Asiatic Society*, New Series XX, London, 1888, p. 116.

- ㉚ Ghiyāth al-Dīn 'Alī Yazdī, *Rāz-nāma-yi Ghaznavī-i Hindustān*, Ms. J. A. 30000, Pierporpār, 1915; Nizām al-Dīn Shāmī, *Zafar nāma*, ed. F. Tauer, Praha, 1937; Mu'in al-Dīn Naṭanzī, *Muntakhab al-Ta'wīkh-i Mu'inī*, ed. J. Aubin, Tehran, 1957; Taj al-Salmānī, *Shams al-Husn*, ed. H. R. Roemer, Wiesbaden, 1956.

- ㉛ ヤズデーの『勝利の書』は、ティムールの第四子シャーハーン Shāhrukh の子イブラヒム・スルターン Ibrahim Sulṭān の君臨するフォルスの宮廷で、一四二四—二五年に完成された。なお、バルトリドは、このような物語は、ティムール朝の宮廷でウイグル人の書記によってウイグル文字で書かれた『ハーン史』*Tārīkh-i Khānī* に記載され、それがヤズデーによって利用されたのびはなつかう推定してゐる。W.

Barthold, *Turkestan*, p. 53. じふごきは散逸した『ハーン史』
 じふごきは B. B. Бартольд, "Отчет о командировке
 в Туркестан," *Сочинения*, VII, Москва, 1973, стр.
 131 参照。

② Nizām al-Dīn Shāmī, *Zafar nāma*, pp. 9—10.

③ *ibid.*, p. 14.

④ 『元朝秘史』二二〇節。なお、村上正二氏は、このスク・ヤ
 チェンとカラチャルをオロナウル Oronaur 族の出身といわれ
 るが、彼等がバルラス部の出身である事は間違いない。(村上
 正二(譯註)『モンゴル秘史』1、昭和四十五年、二四〇—
 二四一頁)。

⑤ Rashid al-Dīn Fadl Allah, *Jāmi' al-Ta'wārikh*, I, ed.
 Bahman Karīmī, Tehran, 1338, p. 185.

⑥ 『元朝秘史』四十六節。

⑦ 同上。

⑧ これについては、本田實信「成吉思汗の十三翼について」
 『東方學』四、昭和二十七年、をも参照。

⑨ 佐口透「チャガタイ・ハンとその時代」『東洋學報』二九—
 一・二、昭和十七年、本田實信「チンギス・ハンの千戸」『史
 學雜誌』六二—八、昭和二十八年、参照。なお、バルトリドは
 チャガタイにつけられたアミール達として、バルラス部のカラ
 チャル、ジャライル部のムゲ・ノヤン、同じくジャライル部の
 ホシユク・ノヤン、スニト部の小チャガタイ、スルドゥス部の
 クシユルクの名を擧げている(Barthold, *Turkestan*, pp. 468,
 499—500)。「元朝秘史」二四三節には、この他にイドゥクタイ

及びココチャスの名がみえ、またウズベク史料には、他にスル
 ドゥス部のドルジャーニン・ベク、バヤキト部のブカ・ベクの名
 が記われている(*Taavrikh-i Luyida-Hysrat-Hame*, ed.
 A. M. Акрамова, Ташкент, 1967, стр. 104. など)の史
 料については、中見立夫氏所蔵本を堀川徹氏の好意で利用でき
 た。記して謝意を表する。

⑩ Mu'tā al-Dīn Nafāzī, *Muntakhab al-Ta'wārikh-i Mu'tā'i*,
 p. 103.

⑪ Z. V. Togan, "Tabīqā," pp. 108—109.

⑫ Rashid al-Dīn Fadl Allah, *Jāmi' al-Ta'wārikh*, I-1, ed.
 A. A. Romashevich, A. A. Khetagurov, A. A. Alizade,
 Moskva, 1965, pp. 530—531.

⑬ Rashid al-Dīn, *Jāmi' al-Ta'wārikh*, I, ed. B. Karīmī,
 p. 409.

⑭ トプカプ・サライ圖書館藏、寫本番號一五一八。七一七年
 すなわちラシード在世中の寫本。

⑮ Ibn 'Arabsah, *'Ajd'ub al-maqdūr fi akhbār Timur*,
 Cairo, 1305/1887, p. 3; また、この書の英譯 J. H. Sanders,
Tamerlane or Timur, the Great Amir, London, 1936, p. 1.
 なお、イブン・アラブシャーのアラブ語テキストは、佐藤次高
 氏所蔵本を複寫して利用しえたものである。ここに誌して謝意
 を表したい。なお、アバガイはモンゴル語で「皇子」などの
 意でも用いられるから、ボルギユルが本名でアバガイは敬稱で
 ある可能性もある。

⑯ この部分の寫本の文字は不鮮明で正確に讀めないが、一應ハ

スタ本と讀んでおく。

④⑦ *Muqaddima*, 83a.

④⑧ *ibid.*, 83a.

④⑨ バルラス部が、本来のチャガタイ・ウルスを構成した四千戸の最上位に位置する「特別の」千戸であった事については Tegan, "Tabqiq", p. 110 参照。

⑤⑩ Sharaf al-Din, *Zafar nama*, II, ed. M. 'Abbāsī, p. 519.

⑤⑪ *Vida y hazñas del Gran Tamorian*. この書の最良のスペイン語テキストは F. L. Estrada(ed.), *Embajada a Tamorian. Estudio y edición de un manuscrito del siglo XV*, Madrid, 1943 として出版されている。このテキストによったものではないが、英・露・トルコ・ベルシン・中國語への翻譯があり、その内では Guy Le Strange (tr.), *Embassy to Tamerlane, 1403-1406*, London, 1928 が最もすぐれた翻譯と考えられている。この英譯本からの日本語への翻譯が山田信夫氏によって行なわれており、便利である。クラヴィホ(山田信夫譯)『チムール帝國紀行』東京、昭和四十二年。

⑤⑫ この「四〇五人」のところは、山田氏の譯本(一八九ページ)では「五〇六人」となっているが、スペイン語テキスト p. 150 によって訂正した。

⑤⑬ Estrada(ed.), *Embajada*, p. 150; 山田(譯)『チムール帝國紀行』一八九ページ。

⑤⑭ Estrada(ed.), *Embajada*, p. 151; 山田(譯)『チムール帝國紀行』一九〇—一九一ページ。

⑤⑮ Estrada(ed.), *Embajada*, p. 153; 山田(譯)『チムール

帝國紀行』一九二—一九三ページ。なお、チャガタイ族の間で混血がいちいちあった事は、モターリスターンの住民達が彼等をカラウナス *para unas* (「混血、雜種」の意)と蔑稱していた事からわかる。N. Elias & E. D. Ross, *The Tarikh-i-Rashidi of Mirza Muhammad Haidar, Daghlat*, London, 1895, p. 148 参照。

⑤⑯ Estrada(ed.), *Embajada*, p. 150; 山田(譯)『チムール帝國紀行』一八九ページ。

⑤⑰ ジャンの『記録』のテキストは、モランヴィエによって發表されている。H. Moraville, "Mémoire sur Tamerlan et sa cour par un Dominicain, en 1403", *Bibliothèque de l'École des Chartes*, LV, Paris, 1894, pp. 433—464. なお、このテキストを現代フランス語に翻譯したものは M. Brion, *Tamerlan*, Paris, 1963, pp. 281—302 にも收録されている。

⑤⑱ ジャンの來歴と、ティムールの書簡については、Silvestre de Sacy, "Mémoire sur une correspondance inédite de Tamerlan avec Charles VI", *Mémoire de l'Institut Royal de France, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres*, VI, Paris, 1822, pp. 470—522 に詳しい研究が行なわれている。

⑤⑲ Moraville, "Mémoire," pp. 441—442.

⑤⑳ Moraville, "Mémoire," p. 445.

⑤㉑ イブン・アラブシャーの生涯とその著書については C. Brockelmann, *Geschichte der arabischen Literatur*, II,

- が、誤りであるので訂正する。なお、ダーニシヤマンドチャは、ヤズデイーの「序章」では、第二十三代のチャガタイ・ハンと称されている人物である (Yazdi, *Miqadima*, 81b.)。
- ⑦① B. B. Баргольд, “Улугбек,” *Сочинения*, II-2, стр. 48.
- ⑦② B. B. Баргольд, “Улугбек,” стр. 47—48.
- ⑦③ Silvestre de Sacy, “Mémoire,” p. 473. なお、¹⁾ ²⁾ ³⁾ ⁴⁾ ⁵⁾ ⁶⁾ ⁷⁾ ⁸⁾ ⁹⁾ ¹⁰⁾ ¹¹⁾ ¹²⁾ ¹³⁾ ¹⁴⁾ ¹⁵⁾ ¹⁶⁾ ¹⁷⁾ ¹⁸⁾ ¹⁹⁾ ²⁰⁾ ²¹⁾ ²²⁾ ²³⁾ ²⁴⁾ ²⁵⁾ ²⁶⁾ ²⁷⁾ ²⁸⁾ ²⁹⁾ ³⁰⁾ ³¹⁾ ³²⁾ ³³⁾ ³⁴⁾ ³⁵⁾ ³⁶⁾ ³⁷⁾ ³⁸⁾ ³⁹⁾ ⁴⁰⁾ ⁴¹⁾ ⁴²⁾ ⁴³⁾ ⁴⁴⁾ ⁴⁵⁾ ⁴⁶⁾ ⁴⁷⁾ ⁴⁸⁾ ⁴⁹⁾ ⁵⁰⁾ ⁵¹⁾ ⁵²⁾ ⁵³⁾ ⁵⁴⁾ ⁵⁵⁾ ⁵⁶⁾ ⁵⁷⁾ ⁵⁸⁾ ⁵⁹⁾ ⁶⁰⁾ ⁶¹⁾ ⁶²⁾ ⁶³⁾ ⁶⁴⁾ ⁶⁵⁾ ⁶⁶⁾ ⁶⁷⁾ ⁶⁸⁾ ⁶⁹⁾ ⁷⁰⁾ ⁷¹⁾ ⁷²⁾ ⁷³⁾ ⁷⁴⁾ ⁷⁵⁾ ⁷⁶⁾ ⁷⁷⁾ ⁷⁸⁾ ⁷⁹⁾ ⁸⁰⁾ ⁸¹⁾ ⁸²⁾ ⁸³⁾ ⁸⁴⁾ ⁸⁵⁾ ⁸⁶⁾ ⁸⁷⁾ ⁸⁸⁾ ⁸⁹⁾ ⁹⁰⁾ ⁹¹⁾ ⁹²⁾ ⁹³⁾ ⁹⁴⁾ ⁹⁵⁾ ⁹⁶⁾ ⁹⁷⁾ ⁹⁸⁾ ⁹⁹⁾ ¹⁰⁰⁾ ¹⁰¹⁾ ¹⁰²⁾ ¹⁰³⁾ ¹⁰⁴⁾ ¹⁰⁵⁾ ¹⁰⁶⁾ ¹⁰⁷⁾ ¹⁰⁸⁾ ¹⁰⁹⁾ ¹¹⁰⁾ ¹¹¹⁾ ¹¹²⁾ ¹¹³⁾ ¹¹⁴⁾ ¹¹⁵⁾ ¹¹⁶⁾ ¹¹⁷⁾ ¹¹⁸⁾ ¹¹⁹⁾ ¹²⁰⁾ ¹²¹⁾ ¹²²⁾ ¹²³⁾ ¹²⁴⁾ ¹²⁵⁾ ¹²⁶⁾ ¹²⁷⁾ ¹²⁸⁾ ¹²⁹⁾ ¹³⁰⁾ ¹³¹⁾ ¹³²⁾ ¹³³⁾ ¹³⁴⁾ ¹³⁵⁾ ¹³⁶⁾ ¹³⁷⁾ ¹³⁸⁾ ¹³⁹⁾ ¹⁴⁰⁾ ¹⁴¹⁾ ¹⁴²⁾ ¹⁴³⁾ ¹⁴⁴⁾ ¹⁴⁵⁾ ¹⁴⁶⁾ ¹⁴⁷⁾ ¹⁴⁸⁾ ¹⁴⁹⁾ ¹⁵⁰⁾ ¹⁵¹⁾ ¹⁵²⁾ ¹⁵³⁾ ¹⁵⁴⁾ ¹⁵⁵⁾ ¹⁵⁶⁾ ¹⁵⁷⁾ ¹⁵⁸⁾ ¹⁵⁹⁾ ¹⁶⁰⁾ ¹⁶¹⁾ ¹⁶²⁾ ¹⁶³⁾ ¹⁶⁴⁾ ¹⁶⁵⁾ ¹⁶⁶⁾ ¹⁶⁷⁾ ¹⁶⁸⁾ ¹⁶⁹⁾ ¹⁷⁰⁾ ¹⁷¹⁾ ¹⁷²⁾ ¹⁷³⁾ ¹⁷⁴⁾ ¹⁷⁵⁾ ¹⁷⁶⁾ ¹⁷⁷⁾ ¹⁷⁸⁾ ¹⁷⁹⁾ ¹⁸⁰⁾ ¹⁸¹⁾ ¹⁸²⁾ ¹⁸³⁾ ¹⁸⁴⁾ ¹⁸⁵⁾ ¹⁸⁶⁾ ¹⁸⁷⁾ ¹⁸⁸⁾ ¹⁸⁹⁾ ¹⁹⁰⁾ ¹⁹¹⁾ ¹⁹²⁾ ¹⁹³⁾ ¹⁹⁴⁾ ¹⁹⁵⁾ ¹⁹⁶⁾ ¹⁹⁷⁾ ¹⁹⁸⁾ ¹⁹⁹⁾ ²⁰⁰⁾ ²⁰¹⁾ ²⁰²⁾ ²⁰³⁾ ²⁰⁴⁾ ²⁰⁵⁾ ²⁰⁶⁾ ²⁰⁷⁾ ²⁰⁸⁾ ²⁰⁹⁾ ²¹⁰⁾ ²¹¹⁾ ²¹²⁾ ²¹³⁾ ²¹⁴⁾ ²¹⁵⁾ ²¹⁶⁾ ²¹⁷⁾ ²¹⁸⁾ ²¹⁹⁾ ²²⁰⁾ ²²¹⁾ ²²²⁾ ²²³⁾ ²²⁴⁾ ²²⁵⁾ ²²⁶⁾ ²²⁷⁾ ²²⁸⁾ ²²⁹⁾ ²³⁰⁾ ²³¹⁾ ²³²⁾ ²³³⁾ ²³⁴⁾ ²³⁵⁾ ²³⁶⁾ ²³⁷⁾ ²³⁸⁾ ²³⁹⁾ ²⁴⁰⁾ ²⁴¹⁾ ²⁴²⁾ ²⁴³⁾ ²⁴⁴⁾ ²⁴⁵⁾ ²⁴⁶⁾ ²⁴⁷⁾ ²⁴⁸⁾ ²⁴⁹⁾ ²⁵⁰⁾ ²⁵¹⁾ ²⁵²⁾ ²⁵³⁾ ²⁵⁴⁾ ²⁵⁵⁾ ²⁵⁶⁾ ²⁵⁷⁾ ²⁵⁸⁾ ²⁵⁹⁾ ²⁶⁰⁾ ²⁶¹⁾ ²⁶²⁾ ²⁶³⁾ ²⁶⁴⁾ ²⁶⁵⁾ ²⁶⁶⁾ ²⁶⁷⁾ ²⁶⁸⁾ ²⁶⁹⁾ ²⁷⁰⁾ ²⁷¹⁾ ²⁷²⁾ ²⁷³⁾ ²⁷⁴⁾ ²⁷⁵⁾ ²⁷⁶⁾ ²⁷⁷⁾ ²⁷⁸⁾ ²⁷⁹⁾ ²⁸⁰⁾ ²⁸¹⁾ ²⁸²⁾ ²⁸³⁾ ²⁸⁴⁾ ²⁸⁵⁾ ²⁸⁶⁾ ²⁸⁷⁾ ²⁸⁸⁾ ²⁸⁹⁾ ²⁹⁰⁾ ²⁹¹⁾ ²⁹²⁾ ²⁹³⁾ ²⁹⁴⁾ ²⁹⁵⁾ ²⁹⁶⁾ ²⁹⁷⁾ ²⁹⁸⁾ ²⁹⁹⁾ ³⁰⁰⁾ ³⁰¹⁾ ³⁰²⁾ ³⁰³⁾ ³⁰⁴⁾ ³⁰⁵⁾ ³⁰⁶⁾ ³⁰⁷⁾ ³⁰⁸⁾ ³⁰⁹⁾ ³¹⁰⁾ ³¹¹⁾ ³¹²⁾ ³¹³⁾ ³¹⁴⁾ ³¹⁵⁾ ³¹⁶⁾ ³¹⁷⁾ ³¹⁸⁾ ³¹⁹⁾ ³²⁰⁾ ³²¹⁾ ³²²⁾ ³²³⁾ ³²⁴⁾ ³²⁵⁾ ³²⁶⁾ ³²⁷⁾ ³²⁸⁾ ³²⁹⁾ ³³⁰⁾ ³³¹⁾ ³³²⁾ ³³³⁾ ³³⁴⁾ ³³⁵⁾ ³³⁶⁾ ³³⁷⁾ ³³⁸⁾ ³³⁹⁾ ³⁴⁰⁾ ³⁴¹⁾ ³⁴²⁾ ³⁴³⁾ ³⁴⁴⁾ ³⁴⁵⁾ ³⁴⁶⁾ ³⁴⁷⁾ ³⁴⁸⁾ ³⁴⁹⁾ ³⁵⁰⁾ ³⁵¹⁾ ³⁵²⁾ ³⁵³⁾ ³⁵⁴⁾ ³⁵⁵⁾ ³⁵⁶⁾ ³⁵⁷⁾ ³⁵⁸⁾ ³⁵⁹⁾ ³⁶⁰⁾ ³⁶¹⁾ ³⁶²⁾ ³⁶³⁾ ³⁶⁴⁾ ³⁶⁵⁾ ³⁶⁶⁾ ³⁶⁷⁾ ³⁶⁸⁾ ³⁶⁹⁾ ³⁷⁰⁾ ³⁷¹⁾ ³⁷²⁾ ³⁷³⁾ ³⁷⁴⁾ ³⁷⁵⁾ ³⁷⁶⁾ ³⁷⁷⁾ ³⁷⁸⁾ ³⁷⁹⁾ ³⁸⁰⁾ ³⁸¹⁾ ³⁸²⁾ ³⁸³⁾ ³⁸⁴⁾ ³⁸⁵⁾ ³⁸⁶⁾ ³⁸⁷⁾ ³⁸⁸⁾ ³⁸⁹⁾ ³⁹⁰⁾ ³⁹¹⁾ ³⁹²⁾ ³⁹³⁾ ³⁹⁴⁾ ³⁹⁵⁾ ³⁹⁶⁾ ³⁹⁷⁾ ³⁹⁸⁾ ³⁹⁹⁾ ⁴⁰⁰⁾ ⁴⁰¹⁾ ⁴⁰²⁾ ⁴⁰³⁾ ⁴⁰⁴⁾ ⁴⁰⁵⁾ ⁴⁰⁶⁾ ⁴⁰⁷⁾ ⁴⁰⁸⁾ ⁴⁰⁹⁾ ⁴¹⁰⁾ ⁴¹¹⁾ ⁴¹²⁾ ⁴¹³⁾ ⁴¹⁴⁾ ⁴¹⁵⁾ ⁴¹⁶⁾ ⁴¹⁷⁾ ⁴¹⁸⁾ ⁴¹⁹⁾ ⁴²⁰⁾ ⁴²¹⁾ ⁴²²⁾ ⁴²³⁾ ⁴²⁴⁾ ⁴²⁵⁾ ⁴²⁶⁾ ⁴²⁷⁾ ⁴²⁸⁾ ⁴²⁹⁾ ⁴³⁰⁾ ⁴³¹⁾ ⁴³²⁾ ⁴³³⁾ ⁴³⁴⁾ ⁴³⁵⁾ ⁴³⁶⁾ ⁴³⁷⁾ ⁴³⁸⁾ ⁴³⁹⁾ ⁴⁴⁰⁾ ⁴⁴¹⁾ ⁴⁴²⁾ ⁴⁴³⁾ ⁴⁴⁴⁾ ⁴⁴⁵⁾ ⁴⁴⁶⁾ ⁴⁴⁷⁾ ⁴⁴⁸⁾ ⁴⁴⁹⁾ ⁴⁵⁰⁾ ⁴⁵¹⁾ ⁴⁵²⁾ ⁴⁵³⁾ ⁴⁵⁴⁾ ⁴⁵⁵⁾ ⁴⁵⁶⁾ ⁴⁵⁷⁾ ⁴⁵⁸⁾ ⁴⁵⁹⁾ ⁴⁶⁰⁾ ⁴⁶¹⁾ ⁴⁶²⁾ ⁴⁶³⁾ ⁴⁶⁴⁾ ⁴⁶⁵⁾ ⁴⁶⁶⁾ ⁴⁶⁷⁾ ⁴⁶⁸⁾ ⁴⁶⁹⁾ ⁴⁷⁰⁾ ⁴⁷¹⁾ ⁴⁷²⁾ ⁴⁷³⁾ ⁴⁷⁴⁾ ⁴⁷⁵⁾ ⁴⁷⁶⁾ ⁴⁷⁷⁾ ⁴⁷⁸⁾ ⁴⁷⁹⁾ ⁴⁸⁰⁾ ⁴⁸¹⁾ ⁴⁸²⁾ ⁴⁸³⁾ ⁴⁸⁴⁾ ⁴⁸⁵⁾ ⁴⁸⁶⁾ ⁴⁸⁷⁾ ⁴⁸⁸⁾ ⁴⁸⁹⁾ ⁴⁹⁰⁾ ⁴⁹¹⁾ ⁴⁹²⁾ ⁴⁹³⁾ ⁴⁹⁴⁾ ⁴⁹⁵⁾ ⁴⁹⁶⁾ ⁴⁹⁷⁾ ⁴⁹⁸⁾ ⁴⁹⁹⁾ ⁵⁰⁰⁾ ⁵⁰¹⁾ ⁵⁰²⁾ ⁵⁰³⁾ ⁵⁰⁴⁾ ⁵⁰⁵⁾ ⁵⁰⁶⁾ ⁵⁰⁷⁾ ⁵⁰⁸⁾ ⁵⁰⁹⁾ ⁵¹⁰⁾ ⁵¹¹⁾ ⁵¹²⁾ ⁵¹³⁾ ⁵¹⁴⁾ ⁵¹⁵⁾ ⁵¹⁶⁾ ⁵¹⁷⁾ ⁵¹⁸⁾ ⁵¹⁹⁾ ⁵²⁰⁾ ⁵²¹⁾ ⁵²²⁾ ⁵²³⁾ ⁵²⁴⁾ ⁵²⁵⁾ ⁵²⁶⁾ ⁵²⁷⁾ ⁵²⁸⁾ ⁵²⁹⁾ ⁵³⁰⁾ ⁵³¹⁾ ⁵³²⁾ ⁵³³⁾ ⁵³⁴⁾ ⁵³⁵⁾ ⁵³⁶⁾ ⁵³⁷⁾ ⁵³⁸⁾ ⁵³⁹⁾ ⁵⁴⁰⁾ ⁵⁴¹⁾ ⁵⁴²⁾ ⁵⁴³⁾ ⁵⁴⁴⁾ ⁵⁴⁵⁾ ⁵⁴⁶⁾ ⁵⁴⁷⁾ ⁵⁴⁸⁾ ⁵⁴⁹⁾ ⁵⁵⁰⁾ ⁵⁵¹⁾ ⁵⁵²⁾ ⁵⁵³⁾ ⁵⁵⁴⁾ ⁵⁵⁵⁾ ⁵⁵⁶⁾ ⁵⁵⁷⁾ ⁵⁵⁸⁾ ⁵⁵⁹⁾ ⁵⁶⁰⁾ ⁵⁶¹⁾ ⁵⁶²⁾ ⁵⁶³⁾ ⁵⁶⁴⁾ ⁵⁶⁵⁾ ⁵⁶⁶⁾ ⁵⁶⁷⁾ ⁵⁶⁸⁾ ⁵⁶⁹⁾ ⁵⁷⁰⁾ ⁵⁷¹⁾ ⁵⁷²⁾ ⁵⁷³⁾ ⁵⁷⁴⁾ ⁵⁷⁵⁾ ⁵⁷⁶⁾ ⁵⁷⁷⁾ ⁵⁷⁸⁾ ⁵⁷⁹⁾ ⁵⁸⁰⁾ ⁵⁸¹⁾ ⁵⁸²⁾ ⁵⁸³⁾ ⁵⁸⁴⁾ ⁵⁸⁵⁾ ⁵⁸⁶⁾ ⁵⁸⁷⁾ ⁵⁸⁸⁾ ⁵⁸⁹⁾ ⁵⁹⁰⁾ ⁵⁹¹⁾ ⁵⁹²⁾ ⁵⁹³⁾ ⁵⁹⁴⁾ ⁵⁹⁵⁾ ⁵⁹⁶⁾ ⁵⁹⁷⁾ ⁵⁹⁸⁾ ⁵⁹⁹⁾ ⁶⁰⁰⁾ ⁶⁰¹⁾ ⁶⁰²⁾ ⁶⁰³⁾ ⁶⁰⁴⁾ ⁶⁰⁵⁾ ⁶⁰⁶⁾ ⁶⁰⁷⁾ ⁶⁰⁸⁾ ⁶⁰⁹⁾ ⁶¹⁰⁾ ⁶¹¹⁾ ⁶¹²⁾ ⁶¹³⁾ ⁶¹⁴⁾ ⁶¹⁵⁾ ⁶¹⁶⁾ ⁶¹⁷⁾ ⁶¹⁸⁾ ⁶¹⁹⁾ ⁶²⁰⁾ ⁶²¹⁾ ⁶²²⁾ ⁶²³⁾ ⁶²⁴⁾ ⁶²⁵⁾ ⁶²⁶⁾ ⁶²⁷⁾ ⁶²⁸⁾ ⁶²⁹⁾ ⁶³⁰⁾ ⁶³¹⁾ ⁶³²⁾ ⁶³³⁾ ⁶³⁴⁾ ⁶³⁵⁾ ⁶³⁶⁾ ⁶³⁷⁾ ⁶³⁸⁾ ⁶³⁹⁾ ⁶⁴⁰⁾ ⁶⁴¹⁾ ⁶⁴²⁾ ⁶⁴³⁾ ⁶⁴⁴⁾ ⁶⁴⁵⁾ ⁶⁴⁶⁾ ⁶⁴⁷⁾ ⁶⁴⁸⁾ ⁶⁴⁹⁾ ⁶⁵⁰⁾ ⁶⁵¹⁾ ⁶⁵²⁾ ⁶⁵³⁾ ⁶⁵⁴⁾ ⁶⁵⁵⁾ ⁶⁵⁶⁾ ⁶⁵⁷⁾ ⁶⁵⁸⁾ ⁶⁵⁹⁾ ⁶⁶⁰⁾ ⁶⁶¹⁾ ⁶⁶²⁾ ⁶⁶³⁾ ⁶⁶⁴⁾ ⁶⁶⁵⁾ ⁶⁶⁶⁾ ⁶⁶⁷⁾ ⁶⁶⁸⁾ ⁶⁶⁹⁾ ⁶⁷⁰⁾ ⁶⁷¹⁾ ⁶⁷²⁾ ⁶⁷³⁾ ⁶⁷⁴⁾ ⁶⁷⁵⁾ ⁶⁷⁶⁾ ⁶⁷⁷⁾ ⁶⁷⁸⁾ ⁶⁷⁹⁾ ⁶⁸⁰⁾ ⁶⁸¹⁾ ⁶⁸²⁾ ⁶⁸³⁾ ⁶⁸⁴⁾ ⁶⁸⁵⁾ ⁶⁸⁶⁾ ⁶⁸⁷⁾ ⁶⁸⁸⁾ ⁶⁸⁹⁾ ⁶⁹⁰⁾ ⁶⁹¹⁾ ⁶⁹²⁾ ⁶⁹³⁾ ⁶⁹⁴⁾ ⁶⁹⁵⁾ ⁶⁹⁶⁾ ⁶⁹⁷⁾ ⁶⁹⁸⁾ ⁶⁹⁹⁾ ⁷⁰⁰⁾ ⁷⁰¹⁾ ⁷⁰²⁾ ⁷⁰³⁾ ⁷⁰⁴⁾ ⁷⁰⁵⁾ ⁷⁰⁶⁾ ⁷⁰⁷⁾ ⁷⁰⁸⁾ ⁷⁰⁹⁾ ⁷¹⁰⁾ ⁷¹¹⁾ ⁷¹²⁾ ⁷¹³⁾ ⁷¹⁴⁾ ⁷¹⁵⁾ ⁷¹⁶⁾ ⁷¹⁷⁾ ⁷¹⁸⁾ ⁷¹⁹⁾ ⁷²⁰⁾ ⁷²¹⁾ ⁷²²⁾ ⁷²³⁾ ⁷²⁴⁾ ⁷²⁵⁾ ⁷²⁶⁾ ⁷²⁷⁾ ⁷²⁸⁾ ⁷²⁹⁾ ⁷³⁰⁾ ⁷³¹⁾ ⁷³²⁾ ⁷³³⁾ ⁷³⁴⁾ ⁷³⁵⁾ ⁷³⁶⁾ ⁷³⁷⁾ ⁷³⁸⁾ ⁷³⁹⁾ ⁷⁴⁰⁾ ⁷⁴¹⁾ ⁷⁴²⁾ ⁷⁴³⁾ ⁷⁴⁴⁾ ⁷⁴⁵⁾ ⁷⁴⁶⁾ ⁷⁴⁷⁾ ⁷⁴⁸⁾ ⁷⁴⁹⁾ ⁷⁵⁰⁾ ⁷⁵¹⁾ ⁷⁵²⁾ ⁷⁵³⁾ ⁷⁵⁴⁾ ⁷⁵⁵⁾ ⁷⁵⁶⁾ ⁷⁵⁷⁾ ⁷⁵⁸⁾ ⁷⁵⁹⁾ ⁷⁶⁰⁾ ⁷⁶¹⁾ ⁷⁶²⁾ ⁷⁶³⁾ ⁷⁶⁴⁾ ⁷⁶⁵⁾ ⁷⁶⁶⁾ ⁷⁶⁷⁾ ⁷⁶⁸⁾ ⁷⁶⁹⁾ ⁷⁷⁰⁾ ⁷⁷¹⁾ ⁷⁷²⁾ ⁷⁷³⁾ ⁷⁷⁴⁾ ⁷⁷⁵⁾ ⁷⁷⁶⁾ ⁷⁷⁷⁾ ⁷⁷⁸⁾ ⁷⁷⁹⁾ ⁷⁸⁰⁾ ⁷⁸¹⁾ ⁷⁸²⁾ ⁷⁸³⁾ ⁷⁸⁴⁾ ⁷⁸⁵⁾ ⁷⁸⁶⁾ ⁷⁸⁷⁾ ⁷⁸⁸⁾ ⁷⁸⁹⁾ ⁷⁹⁰⁾ ⁷⁹¹⁾ ⁷⁹²⁾ ⁷⁹³⁾ ⁷⁹⁴⁾ ⁷⁹⁵⁾ ⁷⁹⁶⁾ ⁷⁹⁷⁾ ⁷⁹⁸⁾ ⁷⁹⁹⁾ ⁸⁰⁰⁾ ⁸⁰¹⁾ ⁸⁰²⁾ ⁸⁰³⁾ ⁸⁰⁴⁾ ⁸⁰⁵⁾ ⁸⁰⁶⁾ ⁸⁰⁷⁾ ⁸⁰⁸⁾ ⁸⁰⁹⁾ ⁸¹⁰⁾ ⁸¹¹⁾ ⁸¹²⁾ ⁸¹³⁾ ⁸¹⁴⁾ ⁸¹⁵⁾ ⁸¹⁶⁾ ⁸¹⁷⁾ ⁸¹⁸⁾ ⁸¹⁹⁾ ⁸²⁰⁾ ⁸²¹⁾ ⁸²²⁾ ⁸²³⁾ ⁸²⁴⁾ ⁸²⁵⁾ ⁸²⁶⁾ ⁸²⁷⁾ ⁸²⁸⁾ ⁸²⁹⁾ ⁸³⁰⁾ ⁸³¹⁾ ⁸³²⁾ ⁸³³⁾ ⁸³⁴⁾ ⁸³⁵⁾ ⁸³⁶⁾ ⁸³⁷⁾ ⁸³⁸⁾ ⁸³⁹⁾ ⁸⁴⁰⁾ ⁸⁴¹⁾ ⁸⁴²⁾ ⁸⁴³⁾ ⁸⁴⁴⁾ ⁸⁴⁵⁾ ⁸⁴⁶⁾ ⁸⁴⁷⁾ ⁸⁴⁸⁾ ⁸⁴⁹⁾ ⁸⁵⁰⁾ ⁸⁵¹⁾ ⁸⁵²⁾ ⁸⁵³⁾ ⁸⁵⁴⁾ ⁸⁵⁵⁾ ⁸⁵⁶⁾ ⁸⁵⁷⁾ ⁸⁵⁸⁾ ⁸⁵⁹⁾ ⁸⁶⁰⁾ ⁸⁶¹⁾ ⁸⁶²⁾ ⁸⁶³⁾ ⁸⁶⁴⁾ ⁸⁶⁵⁾ ⁸⁶⁶⁾ ⁸⁶⁷⁾ ⁸⁶⁸⁾ ⁸⁶⁹⁾ ⁸⁷⁰⁾ ⁸⁷¹⁾ ⁸⁷²⁾ ⁸⁷³⁾ ⁸⁷⁴⁾ ⁸⁷⁵⁾ ⁸⁷⁶⁾ ⁸⁷⁷⁾ ⁸⁷⁸⁾ ⁸⁷⁹⁾ ⁸⁸⁰⁾ ⁸⁸¹⁾ ⁸⁸²⁾ ⁸⁸³⁾ ⁸⁸⁴⁾ ⁸⁸⁵⁾ ⁸⁸⁶⁾ ⁸⁸⁷⁾ ⁸⁸⁸⁾ ⁸⁸⁹⁾ ⁸⁹⁰⁾ ⁸⁹¹⁾ ⁸⁹²⁾ ⁸⁹³⁾ ⁸⁹⁴⁾ ⁸⁹⁵⁾ ⁸⁹⁶⁾ ⁸⁹⁷⁾ ⁸⁹⁸⁾ ⁸⁹⁹⁾ ⁹⁰⁰⁾ ⁹⁰¹⁾ ⁹⁰²⁾ ⁹⁰³⁾ ⁹⁰⁴⁾ ⁹⁰⁵⁾ ⁹⁰⁶⁾ ⁹⁰⁷⁾ ⁹⁰⁸⁾ ⁹⁰⁹⁾ ⁹¹⁰⁾ ⁹¹¹⁾ ⁹¹²⁾ ⁹¹³⁾ ⁹¹⁴⁾ ⁹¹⁵⁾ ⁹¹⁶⁾ ⁹¹⁷⁾ ⁹¹⁸⁾ ⁹¹⁹⁾ ⁹²⁰⁾ ⁹²¹⁾ ⁹²²⁾ ⁹²³⁾ ⁹²⁴⁾ ⁹²⁵⁾ ⁹²⁶⁾ ⁹²⁷⁾ ⁹²⁸⁾ ⁹²⁹⁾ ⁹³⁰⁾ ⁹³¹⁾ ⁹³²⁾ ⁹³³⁾ ⁹³⁴⁾ ⁹³⁵⁾ ⁹³⁶⁾ ⁹³⁷⁾ ⁹³⁸⁾ ⁹³⁹⁾ ⁹⁴⁰⁾ ⁹⁴¹⁾ ⁹⁴²⁾ ⁹⁴³⁾ ⁹⁴⁴⁾ ⁹⁴⁵⁾ ⁹⁴⁶⁾ ⁹⁴⁷⁾ ⁹⁴⁸⁾ ⁹⁴⁹⁾ ⁹⁵⁰⁾ ⁹⁵¹⁾ ⁹⁵²⁾ ⁹⁵³⁾ ⁹⁵⁴⁾ ⁹⁵⁵⁾ ⁹⁵⁶⁾ ⁹⁵⁷⁾ ⁹⁵⁸⁾ ⁹⁵⁹⁾ ⁹⁶⁰⁾ ⁹⁶¹⁾ ⁹⁶²⁾ ⁹⁶³⁾ ⁹⁶⁴⁾ ⁹⁶⁵⁾ ⁹⁶⁶⁾ ⁹⁶⁷⁾ ⁹⁶⁸⁾ ⁹⁶⁹⁾ ⁹⁷⁰⁾ ⁹⁷¹⁾ ⁹⁷²⁾ ⁹⁷³⁾ ⁹⁷⁴⁾ ⁹⁷⁵⁾ ⁹⁷⁶⁾ ⁹⁷⁷⁾ ⁹⁷⁸⁾ ⁹⁷⁹⁾ ⁹⁸⁰⁾ ⁹⁸¹⁾ ⁹⁸²⁾ ⁹⁸³⁾ ⁹⁸⁴⁾ ⁹⁸⁵⁾ ⁹⁸⁶⁾ ⁹⁸⁷⁾ ⁹⁸⁸⁾ ⁹⁸⁹⁾ ⁹⁹⁰⁾ ⁹⁹¹⁾ ⁹⁹²⁾ ⁹⁹³⁾ ⁹⁹⁴⁾ ⁹⁹⁵⁾ ⁹⁹⁶⁾ ⁹⁹⁷⁾ ⁹⁹⁸⁾ ⁹⁹⁹⁾ ¹⁰⁰⁰⁾ ¹⁰⁰¹⁾ ¹⁰⁰²⁾ ¹⁰⁰³⁾ ¹⁰⁰⁴⁾ ¹⁰⁰⁵⁾ ¹⁰⁰⁶⁾ ¹⁰⁰⁷⁾ ¹⁰⁰⁸⁾ ¹⁰⁰⁹⁾ ¹⁰¹⁰⁾ ¹⁰¹¹⁾ ¹⁰¹²⁾ ¹⁰¹³⁾ ¹⁰¹⁴⁾ ¹⁰¹⁵⁾ ¹⁰¹⁶⁾ ¹⁰¹⁷⁾ ¹⁰¹⁸⁾ ¹⁰¹⁹⁾ ¹⁰²⁰⁾ ¹⁰²¹⁾ ¹⁰²²⁾ ¹⁰²³⁾ ¹⁰²⁴⁾ ¹⁰²⁵⁾ ¹⁰²⁶⁾ ¹⁰²⁷⁾ ¹⁰²⁸⁾ ¹⁰²⁹⁾ ¹⁰³⁰⁾ ¹⁰³¹⁾ ¹⁰³²⁾ ¹⁰³³⁾ ¹⁰³⁴⁾ ¹⁰³⁵⁾ ¹⁰³⁶⁾ ¹⁰³⁷⁾ ¹⁰³⁸⁾ ¹⁰³⁹⁾ ¹⁰⁴⁰⁾ ¹⁰⁴¹⁾ ¹⁰⁴²⁾ ¹⁰⁴³⁾ ¹⁰⁴⁴⁾ ¹⁰⁴⁵⁾ ¹⁰⁴⁶⁾ ¹⁰⁴⁷⁾ ¹⁰⁴⁸⁾ ¹⁰⁴⁹⁾ ¹⁰⁵⁰⁾ ¹⁰⁵¹⁾ ¹⁰⁵²⁾ ¹⁰⁵³⁾ ¹⁰⁵⁴⁾ ¹⁰⁵⁵⁾ ¹⁰⁵⁶⁾ ¹⁰⁵⁷⁾ ¹⁰⁵⁸⁾ ¹⁰⁵⁹⁾ ¹⁰⁶⁰⁾ ¹⁰⁶¹⁾ ¹⁰⁶²⁾ ¹⁰⁶³⁾ ¹⁰⁶⁴⁾ ¹⁰⁶⁵⁾ ¹⁰⁶⁶⁾ ¹⁰⁶⁷⁾ ¹⁰⁶⁸⁾ ¹⁰⁶⁹⁾ ¹⁰⁷⁰⁾ ¹⁰⁷¹⁾ ¹⁰⁷²⁾ ¹⁰⁷³⁾ ¹⁰⁷⁴⁾ ¹⁰⁷⁵⁾ ¹⁰⁷⁶⁾ ¹⁰⁷⁷⁾ ¹⁰⁷⁸⁾ ¹⁰⁷⁹⁾ ¹⁰⁸⁰⁾ ¹⁰⁸¹⁾ ¹⁰⁸²⁾ ¹⁰⁸³⁾ ¹⁰⁸⁴⁾ ¹⁰⁸⁵⁾ ¹⁰⁸⁶⁾ ¹⁰⁸⁷⁾ ¹⁰⁸⁸⁾ ¹⁰⁸⁹⁾ ¹⁰⁹⁰⁾ ¹⁰⁹¹⁾ ¹⁰⁹²⁾ ¹⁰⁹³⁾ ¹⁰⁹⁴⁾ ¹⁰⁹⁵⁾ ¹⁰⁹⁶⁾ ¹⁰⁹⁷⁾ ¹⁰⁹⁸⁾ ¹⁰⁹⁹⁾ ¹¹⁰⁰⁾ ¹¹⁰¹⁾ ¹¹⁰²⁾ ¹¹⁰³⁾ ¹¹⁰⁴⁾ ¹¹⁰⁵⁾ ¹¹⁰⁶⁾ ¹¹⁰⁷⁾ ¹¹⁰⁸⁾ ¹¹⁰⁹⁾ ¹¹¹⁰⁾ ¹¹¹¹⁾ ¹¹¹²⁾ ¹¹¹³⁾ ¹¹¹⁴⁾ ¹¹¹⁵⁾ ¹¹¹⁶⁾ ¹¹¹⁷⁾ ¹¹¹⁸⁾ ¹¹¹⁹⁾ ¹¹²⁰⁾ ¹¹²¹⁾ ¹¹²²⁾ ¹¹²³⁾ ¹¹²⁴⁾ ¹¹²⁵⁾ ¹¹²⁶⁾ ¹¹²⁷⁾ ¹¹²⁸⁾ ¹¹²⁹⁾ ¹¹³⁰⁾ ¹¹³¹⁾ ¹¹³²⁾ ¹¹³³⁾ ¹¹³⁴⁾ ¹¹³⁵⁾ ¹¹³⁶⁾ ¹¹³⁷⁾ ¹¹³⁸⁾ ¹¹³⁹⁾ ¹¹⁴⁰⁾ ¹¹⁴¹⁾ ¹¹⁴²⁾ ¹¹⁴³⁾ ¹¹⁴⁴⁾ ¹¹⁴⁵⁾ ¹¹⁴⁶⁾ ¹¹⁴⁷⁾ ¹¹⁴⁸⁾ ¹¹⁴⁹⁾ ¹¹⁵⁰⁾ ¹¹⁵¹⁾ ¹¹⁵²⁾ ¹¹⁵³⁾ ¹¹⁵⁴⁾ ¹¹⁵⁵⁾ ¹¹⁵⁶⁾ ¹¹⁵⁷⁾ ¹¹⁵⁸⁾ ¹¹⁵⁹⁾ ¹¹⁶⁰⁾ ¹¹⁶¹⁾ ¹¹⁶²⁾ ¹¹⁶³⁾ ¹¹⁶⁴⁾ ¹¹⁶⁵⁾ ¹¹⁶⁶⁾ ¹¹⁶⁷⁾ ¹¹⁶⁸⁾ ¹¹⁶⁹⁾ ¹¹⁷⁰⁾ ¹¹⁷¹⁾ ¹¹⁷²⁾ ¹¹⁷³⁾ ¹¹⁷⁴⁾ ¹¹⁷⁵⁾ ¹¹⁷⁶⁾ ¹¹⁷⁷⁾ ¹¹⁷⁸⁾ ¹¹⁷⁹⁾ ¹¹⁸⁰⁾ ¹¹⁸¹⁾ ¹¹⁸²⁾ ¹¹⁸³⁾ ¹¹⁸⁴⁾ ¹¹⁸⁵⁾ ¹¹⁸⁶⁾ ¹¹⁸⁷⁾ ¹¹⁸⁸⁾ ¹¹⁸⁹⁾ ¹¹⁹⁰⁾ ¹¹⁹¹⁾ ¹¹⁹²⁾ ¹¹⁹³⁾ ¹¹⁹⁴⁾ ¹¹⁹⁵⁾ ¹¹⁹⁶⁾ ¹¹⁹⁷⁾ ¹¹⁹⁸⁾ ¹¹⁹⁹⁾ ¹²⁰⁰⁾ ¹²⁰¹⁾ ¹²⁰²⁾ ¹²⁰³⁾ ¹²⁰⁴⁾ ¹²⁰⁵⁾ ¹²⁰⁶⁾ ¹²⁰⁷⁾ ¹²⁰⁸⁾ ¹²⁰⁹⁾ ¹²¹⁰⁾ ¹²¹¹⁾ ¹²¹²⁾ ¹²¹³⁾ ¹²¹⁴⁾ ¹²¹⁵⁾ ¹²¹⁶⁾ ¹²¹⁷⁾ ¹²¹⁸⁾ ¹²¹⁹⁾ ¹²²⁰⁾ ¹²²¹⁾ ¹²²²⁾ ¹²²³⁾ ¹²²⁴⁾ ¹²²⁵⁾ ¹²²⁶⁾ ¹²²⁷⁾ ¹²²⁸⁾ ¹²²⁹⁾ ¹²³⁰⁾ ¹²³¹⁾ ¹²³²⁾ ¹²³³⁾ ¹²³⁴⁾ ¹²³⁵⁾ ¹²³⁶⁾ ¹²³⁷⁾ ¹²³⁸⁾ ¹²³⁹⁾ ¹²⁴⁰⁾ ¹²⁴¹⁾ ¹²⁴²⁾ ¹²⁴³⁾ ¹²⁴⁴⁾ ¹²⁴⁵⁾ ¹²⁴⁶⁾ ¹²⁴⁷⁾ ¹²⁴⁸⁾ ¹²⁴⁹⁾ ¹²⁵⁰⁾ ¹²⁵¹⁾ ¹²⁵²⁾ ¹²⁵³⁾ ¹²⁵⁴⁾ ¹²⁵⁵⁾ ¹²⁵⁶⁾ ¹²⁵⁷⁾ ¹²⁵⁸⁾ ¹²⁵⁹⁾ ¹²⁶⁰⁾ ¹²⁶¹⁾ ¹²⁶²⁾ ¹²⁶³⁾ ¹²⁶⁴⁾ ¹²⁶⁵⁾ ¹²⁶⁶⁾ ¹²⁶⁷⁾ ¹²⁶⁸⁾ ¹²⁶⁹⁾ ¹²⁷⁰⁾ ¹²⁷¹⁾ ¹²⁷²⁾ ¹²⁷³⁾ ¹²⁷⁴⁾ ¹²⁷⁵⁾ ¹²⁷⁶⁾ ¹²⁷⁷⁾ ¹²⁷⁸⁾ ¹²⁷⁹⁾ ¹²⁸⁰⁾ ¹²⁸¹⁾ ¹²⁸²⁾ ¹²⁸³⁾ ¹²⁸⁴⁾ ¹²⁸⁵⁾ ¹²⁸⁶⁾ ¹²⁸⁷⁾ ¹²⁸⁸⁾ ¹²⁸⁹⁾ ¹²⁹⁰⁾ ¹²⁹¹⁾ ¹²⁹²⁾ ¹²⁹³⁾ ¹²⁹⁴⁾ ¹²⁹⁵⁾ ¹²⁹⁶⁾ ¹²⁹⁷⁾ ¹²⁹⁸⁾ ¹²⁹⁹⁾ ¹³⁰⁰⁾ ¹³⁰¹⁾ ¹³⁰²⁾ ¹³⁰³⁾ ¹³⁰⁴⁾ ¹³⁰⁵⁾ ¹³⁰⁶⁾ ¹³⁰⁷⁾ ¹³⁰⁸⁾ ¹³⁰⁹⁾ ¹³¹⁰⁾ ¹³¹¹⁾ ¹³¹²⁾ ¹³¹³⁾ ¹³¹⁴⁾ ¹³¹⁵⁾ ¹³¹⁶⁾ ¹³¹⁷⁾ ¹³¹⁸⁾ ¹³¹⁹⁾ ¹³²⁰⁾ ¹³²¹⁾ ¹³²²⁾ ¹³²³⁾ ¹³²⁴⁾ ¹³²⁵⁾ ¹³²⁶⁾

Rivers Zanjān and Abhar.

The Il-khans visited Tabriz and Marāgha only on the way to and from the headquarters. However, they never entered cities and had no intention to settle down there. Furthermore, all the important state affairs and ceremonies of the Il-khans were carried out either at the winter- and summer-quarters or on their way of seasonal migrations.

We may now say that Azerbaijan, where both the headquarters of the Il-khans and the military fiefs of the Mongol tribes were set up, was the *Qol-un Ulus* (the Land of the Middle) of Hulagu Ulus. That is why Azerbaijan became the Land of Turks in due course of time after the Mongol domination.

Amir Timūr Kūrāgān—The Timurid Genealogy and Timur's Position

Eiji Mano

An examination of the problems of the Timurid genealogy on the basis of the available sources from the Mongol period and from the hands of Timur's contemporaries suggests the following conclusions. First, the genealogy of the Timurid line is probably authentic. However, what mattered to Timur himself was not this genealogical record but rather his position—which he won by his abilities—as a son-in-law (*kūrāgān*) of the khan's family and his status as *amīr* or *beg*.

But for the Timurid princes, descendants of Timur, the situation was quite different. What they needed was not a veritable account of their ancestor, who spent much of his existence as a bandit; they wanted stories full of splendor and glory dealing with their ancestors. Therefore

the Timurid genealogy, which had never been an issue for Timur himself, became for his descendents a web of traditions centering around a fictional Oath ; retrieved from the dust, it remains in the sources embellished with the additions of court historians.